

さらば西新校舎

— 西南学院高校の忘れがたき思い出 —

柴田 道明

はじめに

西南学院高校（以下、西南高）が2003（平成15）年に西新校地より百道浜校地に移転して早くも10年に至らんとしている。いずれ西新校地時代の西南高も懐かしい思い出の世界に生きていくことになるに違いない。筆者は学生として、その後教員として併せて40年余り西南高と関わってきた。これまでの人生の多くを西南と過ごしてきたといっても過言ではない。加えて短期間ではあったが近隣の西新小学校にも通学しており、西新校区への愛着は一人のものがある。

西南に寄せる思い出は数限りなくあるが、その中から、特に筆者に関わりが深かったものを幾つか取り上げて語ってみたい。平凡な一教師であった筆者の回顧話から何か資料的な価値が見出されれば幸いである。

最初にお断りしておくが、この稿は高校の雑誌『遙けきかな』第9号に掲載した「西南学院高校小史」、高校の広報紙に連載した“赤れんが”、『開設40周年記念誌西南学院高等学校』の拙文を元としている。内容に繰り返しや重複するところが多々あることをお許し願いたい。

「西南学院高校広報」の発刊について

現在も続いている「西南学院高校広報」について、その発刊に携わった者の一人として、当時の苦労話を記してみたい。広報発刊は1979（昭和54）年3月である。広報の目的として当時の木村良熙校長（第7代校長）は創刊号に『広報の働きは二つあります。第一は広く学校内外の方々との教育についての意見・情報交換の場としていただくことです。…第二は広く西南高校の教育の内容と活動を知っていただくことです。』と述べておられる。その後、題字の文字やデザイン等に多少の変化はあるが、創刊の理念は今に至るまで堅持されている。因みに、その年の卒業式は講堂（チャペル）で実施されており、創刊号には、コーブランド学院長（第12代院長）より卒業証

書が卒業生の一人ひとりに手渡され握手をされている写真が掲載されている。当時の卒業式の姿を残してくれる貴重な写真となっている。

編集委員4名で立ち上げた広報であったが、なにしろ素人に近い者ばかりなので紙面の構成から見出しに至るまで一から始めなければならず、勉強を兼ねながらの作業で苦勞の連続であった。幸いにも印刷所の担当者の厳しくかつ温かい助言と手助けを受けてどうにか第1号を発行することができた。創刊号の編集後記に中村文昭委員長はその時の心境を「広報を発刊することになった。創刊号ということは題字やデザインをきめるという一つとってみても仲々大変なことであった。題字は書道担当の山口裕史先生、デザインは美術担当の白井保章先生と新進気鋭のお二人にお願いした。…今回はまず『広報を発刊したところに意義がある』ということでご勘弁いただきたい。『隅石』は随想・評論を主とするコラムに、『赤れんが』もシリーズものにしたい。卒業生の寄稿文も続けたいと思っている。」と記されている。出来栄えはさておき、ともかく発行に漕ぎつけた安堵の気持を正直に吐露されている。

編集会議で議論となった一つに1面下のコラムの題名の問題があった。大きく言えば広報の顔に当たる。西南の特色を出そうと各人考え抜いた候補名が出されたが、最終的に「隅石」が選ばれた。この題名は振り返ってみても、西南教育の根幹を伝える広報の役割を的確に表現した上手い題名だと自負している。隅石の意味については、広報第2号の本欄で、清水実宗教主任が次のように説明している。「隅石は『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった』（マタイ21・42）と言われた事にもとづく言葉である。…『すみし』と読ませているが『ぐうせき』と読んでいただいて結構である。…マスコミにのり、有名となり、人にもてはやされる事のみ求める風潮の強い現代においても、誰知らぬ片隅みで黙々と人の足を洗い、隣人を愛するわざを行う者こそ尊いのであり、又それこそが西南の精神でもある。この欄も紙面の片隅みにあるが『かしら石』の働きにならいたい。」

「赤れんが」は高校の歴史遺産的なものを探り出して、紹介しようとする歴史読み物を方針とし、筆者の担当で退職年まで連載した（2006（平成18）年発行の28号まで）。執筆にあたって毎号頭を悩ましたのは、テーマの設定とそれに伴う写真等の材料の収集であった。テーマが決定するとそれから関連資料（書籍、雑誌、新聞等）を探し始めるのだが、これが予想以上に困難な作業であった。いつもお世話になったのが、当時学院本部に設置されていた学院史編集室で、ここには足しげくお邪魔して室長の田口欽二氏、書記の川上彌生さんに時間を割いていただき、貴重なお話を伺うことができた。このエッセーが連載できたのも編集室の皆様のお陰だと感謝している。掲載写真はできるだけ珍しいものを拝借したり、筆者自身で撮影したものを使用した。

「赤れんが」では多くの建物や記念碑を記事に取り上げたが、それらも今は赤れんがの講堂（チャペル）を除いてほとんど無くなっている。「赤れんが」の連載記事が西南の歴史を振り返る際に、いささかでも参考になれば有難いと思っている。

『開設40周年記念誌』について

1998（平成10）年に新制高校開設50周年を迎えるにあたって、何か記念に残そうとの議論が持ち上がり、高校50周年史の編纂が決定された。その準備として50周年史の元になる資料集としての40周年史を1988（昭和63）年の40周年に合わせて先に発刊することになった。

筆者を含め9名の委員が担当することになり、編集方針が議論された結果、1986（昭和61）年に発行された「西南学院七十年史」の高校編と重複を避けることを旨とした。その方針に従い、できるだけ文章の量を少なくし、写真等を主とした写真集的な形態をとることとした。発刊の辞で、当時の木村良熙校長は「この記念誌は写真を多く収録し、目でみる40年史として40年の歩みを概観するものとしました」と記念誌の特色を記している。写真以外にも先輩諸氏による座談会、卒業生のメッセージ、年表等いろいろ創意工夫を施した。何よりも資料の収集が第一の仕事であった。高校の資料室が十分に整えられておらず、写真も期待に添うものがあまり手に入らなかった。そのため卒業生・職員の方々に積極的に資料の提供を呼びかけた。多くの方のご尽力により、貴重な写真等多数の資料が集まってきた。ところが今度は逆にその取捨選択に時間がかかることになった。あとがきに「この写真集は50周年誌の為の資料集として編纂したが、創立当時の資料が少なく、事実の確認に非常な労力と時間を要した。一方、最近では写真・資料が多く、どれを選ぶかに多くの論議が費やされた。この様に資料が少なければ少ないで、多ければ多いで時間がかかり、編集は遅々として進まず、休日返上、星を仰いで帰ることも屢々であった」とあって、編集作業の苦労話が綴られている。

1989（平成元年）年、苦労の末に発刊することができた。スクールカラーであるグリーンの装丁、珍しい写真や思い出深い写真が満載の記念誌で、懐かしい本校40年の歴史を一目で振り返ることができるようになっている。心残りなのは、本来の目的であった50周年誌が刊行に至らなかったことである。

“赤れんが”の講堂（チャペル）について

西南に学んだものにとって何よりも忘れられない場所はいうまでもなく赤れんがの講堂（チャペル）（以下、講堂）である。日常の礼拝（チャペル）として使用されたのは当然のこととして、生徒数が少ない時代は入学式、卒業式はじめ大方の行事はこの建物で行われていた。緑の蔦の絡まった赤れんがの講堂は西南に関わるものにとって最も心に残っている場所である。いわば心の故郷である。

本学院最古の建築物であるこの講堂は1920（大正9）年に定礎式が行われ、翌年3月に完成した。この真新しい講堂で記念すべき第1回卒業式が行われた。設計者はアメリカ人のウィリアム・メレル・ヴォーリズでメンソレータムの販売で有名であるが、建築設計事業としてミッションスクールをはじめ1千件余の建築に携わっている。この建物が建築史の上からも評価が高いことは、1979（昭和54）年4月の朝日新聞に掲載された大正・昭和前期名建築623件の一つに選ばれていることからわかる。さらに2000（平成12）年には第14回福岡市都市景観賞を受賞、2004（平成16）年には「福岡市指定有形文化財」「保存建物」に指定されている。

中・高の百道浜移転後、西新校地の建物は全て取り壊され、この講堂が唯一保存されている。現在は西南学院大学博物館（ドージャー記念館）として一般公開されており、創立者ドージャー先生に関する資料を中心にキリスト教関連の展示がされている（写真①）。



写真①

講堂の掲額について

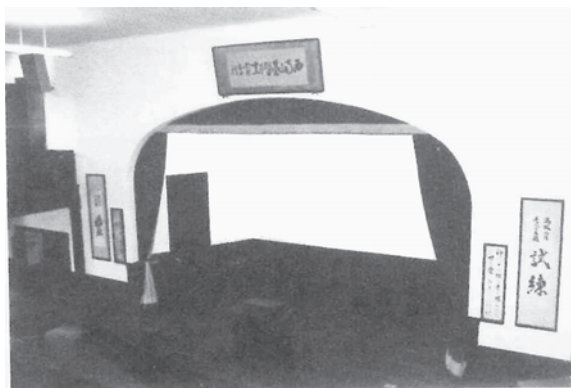
講堂に入場して先ず目に入るのが説教壇真上の扁額であった。創立者C.K.ドージャー先生の言葉で建学の精神となっている誰にも馴染みのある“西南よ基督（キリスト）に忠実なれ”の文字が横長の額に右から左に書かれている。揮毫されたのは本学院の理事長を務められ、書家としても一流であった下瀬加守氏である。校舎移転と共に現在は高校の校長室入口に掲げられている（写真②）。さらに、講堂にはこれに加えて左右に大小四つの縦長の額が掲げられていた。小さな二つはいずれも聖句で、右は「汝の若き日に汝の造り

主を憶えよ（伝道の書12章1節）、左は「神はその独り子を賜ふほどに世を愛したまへり（ヨハネ福音書3章16節）」である。字は中学校の教頭・校長を歴任された山田豊秋先生である。大きな二つは毎月のチャペルの主題で、右が高校、左が中学のものでそれぞれ中・高の書道教師が担当していた（写真③）。

写真②の胸像は創立者C.K.ドージャー先生の像である。この像は1980（昭和55）年度第32回卒業記念事業として制作を依頼されたもので、作者は当時日展評議員、太平洋美術会員であられた池辺瑠璃氏（池辺敬光高校教頭の実妹）である。褐色のブロンズ製の像で、



写真②



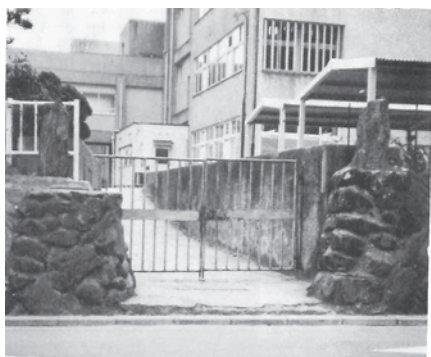
写真③

ンズ像で、高さ50cm、台を含めた全体の高さは155cmである。正面には「西南よキリストに忠実なれ」の文字が浮き彫りされた板が貼り付けてある。この像は講堂1階に設置されていたが、現在は額と同じ場所にある。

記念石碑について

西新校地内にはいくつかの歴史的な記念石碑があった。一つ目は元寇防塁に関するものである。本学院がほぼ防塁上に位置することから、防塁に関わるものが残っていた。筆者の高校時代にもまだ中庭に防塁石が転がっていたことを覚えている。石碑は西側通用門の上に立っていた（写真④）。左右それぞれに『元寇防^(ママ)壘址』「弘安四年五月元軍十萬此の地に來る我軍石壘に據りて防戰士氣大いに奮ふ為に敵軍上陸する事能はず七十餘日空しく海上に漂ふ是れ即ち當時の防壘石也」の文字が陰刻されている。1987（昭和62）年、西側通路拡幅のため撤去された。現在は宮崎宮の境内の一画にその他の元寇関係資料と共に展示されている。石の一つに「西南学院高等学校校内にあったのを此の度縁深い当宮に移築したものである」と記されている（写真⑤）。

二つ目は皇紀二千六百年碑である。この石碑は紀元2600年を記念して1940（昭和15）年に国旗掲揚台として建立されたものである。紀元2600年というのは「神話にもとづき、初代天皇とされる神武天皇の即位が西暦の紀元前660年に行われたとし、この年を日本の建国元年とする紀年法で、2600年たったことを意味している」¹。これにより日本が西暦を使用している世界の国々より優越していることを誇示しようとしたので



写真④



写真⑤

1 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』（中公新書）p. ii より

ある。1940（昭和15）年11月10日、国をあげての記念式典が挙行され、これにキリスト教主義の学校も批判を避けるため協力したのである。この石碑は本校もそれに参加したことの証である。正面には『皇紀二千六百年記念』、裏面には『昭和十五年十月三十日、西南学院中等部、同商業学校』と記されている（写真⑥）。この石碑は筆者の高校時代は藤棚の横にあったが、1983（昭和58）年、本館建設に伴い野球場のバックネット横（現大学東キャンパス北側）に移された。中・高の百道浜校地移転後は残念ながら2010（平成22）年に撤去されたとのことである。この石碑の存在は講堂1階の校長室一角にあった奉安殿²とともに謂わば「負の遺産」として西南の歴史にしっかりと刻んでおかねばならない。



写真⑥

なお、石碑裏面にある商業学校についてであるが、西南学院商業学校は1939（昭和14）年に設立された夜間の商業学校で、その後姿を変えながら1951（昭和26）年まで存続した。第1回卒業生の同窓会である「きさらぎ会」が商業学校設立50周年のメモリアルとして、1993年（平成5）年に記念碑を建立された。講堂前庭の木陰に設置されており、現在も同位置にある。碑は本体が高さ60cm、幅74cm、台座が高さ17cm、幅1mの御影石である。表には講堂説教壇真上にあった扁額と同じ文字の建学の精神が英文と共に、その下に『西南学院商業学校記念碑』と学校の存続期間1939-1951が刻まれている。裏面には『1993年10月建立 同窓生一同』と記されている（写真⑦）。

もう一つ、講堂正面入り口横にも設立当時のままの石碑がある。西南学院校歌碑である。1982（昭和57）年度卒業生が記念事業として贈ってくれたものである。高さ2.3m、底辺3.3mの台形状の花崗岩で、刻まれている文字は池辺敬光高校教頭の手になるものである（写真①⑧）。

最後に校地外ではあるが、学院にとって大変に貴重な記念碑がある。『西南学院発祥の地』記念碑である。それは読売新聞西部本社ビル南側の敷地内にある。この碑を

2 奉安殿とは「太平洋戦争以前、学校で御真影（天皇・皇后の写真-筆者注）や教育勅語を不敬のないように保管するため校舎から離して設けた特別の建物」（日本国語大辞典）のことである。



写真⑦



写真⑧

敷地内に建設する趣旨を読売新聞社は「本社ビル用地は1916（大正5）年、私立西南学院中学校が開校した土地です。これはあまり知られていなかったのですが、各界に多くの人材を輩出している同学院の足跡をきちんと残すことはこの地域を大切にするという本社の決意のあかしにふさわしいことと考え記念碑を建てることになりました」と述べられている。碑の高さ1.8mで碑面の左には縦に「西南学院発祥の地」の文字が、右には最上段に開校時の校舎の写真、その下に「当読売新聞西部本社ビルの建設地は、私立西南学院発祥の地です」の文字が、その下には創立者C.K.ドージャー先生の写真、最下段には「西南学院の創立者C.K.ドージャーは福岡での私立学校教育の必要性を訴え、1916（大正5）4月、在日サザンバプテスト宣教師社団が所有していた福岡バプテスト神学校校舎跡に私立西南学院（中学部）を開校しました。



写真⑨

当時の地名は福岡市大名町105番地、男子生徒104人、教師9人のスタートでした。1918（大正7）年1月西南学院は福岡市西新町（現在地）の土地を購入し念願の新校舎を建設しました」と創立の由来を記している（写真⑨）。

これにより、本学院の創立場所が明確に判明したばかりか、碑の建立により後世に保存されることになった。読売新聞西部本社の御好意に改めてお礼を申しあげたい。

おわりに

「赤れんが」で連載したもののなかでまだまだ紹介したいものも多くあるが、残念ながら割愛せざるをえない。筆者は1960（昭和35）年という戦後の日本でも特記すべき歴史的な時代に入学生、高校生活を送った。そのような時代の空気を共有したものとして忘れられない体験もした。しかし、これらについてもまたの機会に譲りたい。百道浜に移転して西南学院高校も新しい歴史を切り拓いている。新たな進路を考える上で「温故知新」の言葉にあるように、古いものを温めてよみがえらせることも必要ではないだろうか。